

巻頭言

2008.12月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

一念、岩をも通す！2008

茗溪塾塾長 宇野 雅春

人間の意志の力というものはどの程度のものなのだろう？と思うことがあります。受験に携わっていると確かに奇跡のような出来事に遭うことが、たくさんあります。絶対無理だと思う入試に合格するというようなこと...

11月に一番印象的だったのは、韓国の大学受験の過熱ぶりです。将来が大きく変わってしまう大学受験に全身全霊で打ち込んでいる姿が報道されていました。そればかりか、受験生のために警察や交通機関なども非常に協力的に動いていることには、ビックリしました。家族や友人が総出で応援に駆けつけています。どこかでひずみが出るのかもしれないけれど、落ち着いているように見える日本の状況から見ても、笑えない気がしました。なぜなら、日本はもっと深刻な感じがするからです。高学歴で、しかも大学院まで卒業してもなかなか食べていけないような「博士のワーキングプア」という現実が日本にはあります。大学に入りさえすれば何とかエリートコースに乗れるという時代が終わっている一面もあるということです。生活と学問が必ずしも一致しない状況は多分これまでもたくさんあったのだろうとは思いますが、でも、日本社会でも、それなりの大学を出ていることが、生きていく上での大きな助けになっているのは間違いありません。むしろ、受験を否定しやりたいことをやればよ的な考えの方がよほど「茨の道」だと思います。

思春期の頃の一般的な考え方として、「競争」への反発やそれを強制されることへの抵抗感があります。「何のためにこんなに頑張らなきゃいけないんだろう？」的なことです。

またすぐに成果が出ないということで、「どうせ自分は駄目！」と簡単にあきらめるということ...。実はものすごい才能のある人に「学歴」は不要という考えもあります。確かに、スポーツや芸術で力のある人は、その道をまっすぐ突き進むことの方が大切かもしれません。でも、それは、選ばれたほんの一部の人だけのことであり、同時に、そういう人の辛さ、厳しさの方が数倍も大変だと、今なら分かります。

少し前になりますが、自主夜間中学校札幌遠友塾のドキュメンタリー「もう一度学びたい」を見て、思ったことがあります。小さい頃に家庭の事情で教育を受けられなかった人たちがそこには集まっています。字が読めない、字が書けない人たちが、学ぶことで自分を表現できるようになっていく様子が記録されていました。書くことで自分を振り返りずーっと閉ざしてきた心を解放させること、そして同時に、読めることで日常生活のこれまでの不便が解決していくこと、そして最後にその中の一人の誕生日をみんなでお祝いし、「寄せ書き」をプレゼントします。祝われた77歳のその女の方は、生まれて初めて誕生日をお祝いしてもらったことに大喜びをします。ここではじめて、自分が一人ではなく人とつながっていることを実感するのです。

「教育」というのは、人間の生活にとってとても重要なことが分かります。「初等教育」の目的は人間のそもそもの根本を作るものだと思います。そしてそれに続く「高等教育」はより深く物事をとらえる内面の充実のためにあり、より社会に必要な専門性の土台を作るものだと思います。そういう教育が受けられるという幸福を思ってしまいます。「受験」という厳しさも、基本を完全にマスターし、それを次の教育への大きな条件と考えれば、「必要悪」とばかりは言えないのではないのでしょうか？今頑張っていること、今辛い思いをしていることが次の「生きる力」になるはずで、身の回りを見渡すと、人生は奇跡に満ちあふれています。今年のオリンピックやパラリンピックも、人が何かを目指してやり遂げることの「すごさ」を教えてくださいました。

「一念岩をも通す」という奇跡が本当にあるということが、人を感動させ勇気づけてくれるのです。毎日の勉強が重く感じられることがあるかもしれませんが、自分の目標へ向けて、最後の努力を続けて欲しいと思います。